

九州大学韓国研究センター外部評価

服部, 民夫

東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化専攻 : 教授

<http://hdl.handle.net/2324/2198476>

出版情報 : 韓国研究センター年報. 3/4, pp.80-83, 2004-03-15. 九州大学韓国研究センター
バージョン :
権利関係 :



九州大学韓国研究センター外部評価

服部民夫（東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化専攻 教授）

ただいまご紹介いただきました東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化専攻の服部でございます。

まず、韓国国際交流財団が九州大学を「日本における韓国研究の拠点」と位置付けられ、研究資金の供与を開始され、同年12月には「九州大学韓国研究センター」が設置されてほぼ5年、その間の石川センター長をはじめとする九州大学の関係者の方々、その大きな努力を資金面で支え続けられた韓国国際交流財団にまず深甚なる敬意を表したいと思います。

私の所属しております東京大学の韓国朝鮮文化専攻は2002年4月の設置ですから、「センター」はほぼ2年先輩になります。後輩が先輩を評価すると言うのはおこがましい気もいたしますが、お許しを頂きたいと思えます。

最初に、「九州大学韓国研究センター」の日本における韓国研究の中に占める位置について外部にいる者として申し述べたいと思えます。戦前期の研究を別としまして、戦後の韓国研究をリードしたのは歴史学でした。次いで人類学的な研究が盛んになりました。社会科学におきましては国際関係を含む政治学から研究がはじまり、経済研究は韓国の経済発展が進展した80年代にはいって多くの研究が行われるようになりました。社会学はこれらの研究の後塵を拝しましたが、最近になり若い研究者を中心として徐々に研究成果が発表されるようになりました。最近の韓国研究者は、当然のこととは言え韓国語を研究、および研究発表の場で自由に操れるようになり、韓国語が操れない研究者は地域研究者として評価されないレベルにまで達していると思われます。しかし、このように韓国研究が地域研究の中で確固とした地位を占めるようになったのは、それほど古いことではないと思えます。例えば、小生の友人である慶応大学の小此木教授は、韓国研究

者が何人もいる「アジア経済研究所」が院生時代は羨ましかった、と述べられた事があります。小此木教授の院生時代は約30年ほど前ですから、当時、韓国を研究対象とする研究者はかなり孤立して研究を進めていました。しかし、その後の20年ほどで状況は大きく変化しました。韓国語を学ぶ学生が増え、一般の人々もカルチャーセンターなどで言葉や文学、社会を学ぶ人が増え、「漢江の奇跡」を契機とする80年代後半の韓国への関心の高まりを経て、90年代中盤には韓国がすっかり日本社会に定着した、と見ることができます。日本における韓国への関心は、学術の分野にとどまらず、音楽、映画、食べ物、生活スタイルにまで拡大しております。そのような社会的な雰囲気为背景として、九州大学に「韓国研究センター」が国立大学では日本で初めての「韓国研究の拠点」として設置され、約2年後に東京大学に1993年から設置されていた研究組織としての「韓国朝鮮文化研究室」が、2002年4月に教育・研究組織としての独立大学院「韓国朝鮮文化研究専攻」に拡大改編され、この時点において韓国研究は西の拠点として九州大学、東の拠点として東京大学と言う2極体制が形成されたことになりました。東西に研究拠点が設置されことにより、韓国研究は一層進むことになると思われます。この点で、先輩である九州大学が切り開かれた道を私達東京大学も後を追いかけるという形になっております。九州大学と東京大学の拠点としての性格はいささか異なっておりますが、今後ともこの2極が相互に協力することが研究の進展に繋がるものと考えます。

また、報告書等を拝見させていただきましたが、「センター」が大学改革に熱心な九州大学に設置されたことも成功の一つの要因であったと考えます。九州大学は他の国立大学に先駆けて従来の「研究科」「学

部」体制から、「院」「学府」制度を導入され、教官と学生、所属部局と研究プロジェクトの関係が柔軟な制度に改革されたと伺っております。「センター」の報告書を拝見いたしましても、専門委員会もさまざまな「院」に所属されているメンバーにより構成され、また各研究プロジェクトを担当された方々も九州大学全体に広がっております。これは上で述べましたような柔軟な組織でこそ可能となったと思われる。往々にして殊に国立大学では「研究科」や「学部」の壁がかなり強固なものですが、「センター」が共同研究やプロジェクトを柔軟に組むことができた、という事実の背景には、九州大学全体の大学改革があった、と見る事ができると思われる。

次に、韓国国際交流財団の支援事業に対する評価を申し上げたいと思います。この事業に関する評価を行います場合、その基準となるべきは「1999年度 韓国国際交流財団による各種助成事業 実績報告書」に掲げられております4つの目標であろうと考えます。ここでは、

- 1) 教育における拠点形成 — 韓国学研究学生に対する奨学金、短期の韓国訪問語学研修。
- 2) 研究における拠点形成 — 共同研究助成。
- 3) 日韓研究者相互の学術研究ネットワーク形成における拠点形成 — 研究者派遣事業、研究者招聘事業。
- 4) 図書・資料の公開・利用における拠点形成 — 図書・資料整備事業。

が挙げられており、しかもこれらが密接な関連を持って事業が遂行されることが強調されております。評価に関しましてはまずはこれらが達成されたか否か、が判断基準にならうかと思えます。また、その研究あるいは事業遂行のスタイルに関しましては同報告書に収められております石川センター長の「韓国研究センター開所祝賀挨拶」のなかで、一、韓国研究の開かれたネットワークの結節点でありたい。二、共同研究や人の交流を通して韓国から日本へ、そして日本から韓国への十分な情報の流通を確保したい。三、若い世代の新たな日韓関係のために「研究」にこだわらず、日韓の学

術・文化・スポーツなどの情報も提供したい、と述べておられます。以上を基準として以下、思うところを述べさせていただきます。

まず1) についてです。

ここでは教育上の拠点形成が目標として掲げられています。韓国学を研究する学生に対する奨学金についてですが、有為な修士、博士の学生に対して月額各々5万円、7万円の援助は私どもの学生の現状から考えますと大変に学生にとって有り難いものであろうと思えます。報告書によりますと、所期の目的は十分に果たされていると思えます。ただし気になるのは、2000年度報告書だったと思えますが、奨学金を得たものの修士課程で終了する学生の扱いについて、何らかの対応策が考えられる可能性について言及があったと思えますが、博士課程に進学することが人材育成の上で好ましいことは勿論ですが、しかし修士課程で終了し、社会に出てゆく学生が有ったとしても、その学生は韓国に対する専門的な知識と、望ましい印象をもって出てゆくわけですから、それはそれで韓国国際交流財団の奨学金授与の大きな目的は達せられるのではないかと考えます。

語学短期留学が、学生たちの韓国への関心を深め、将来の学問研究へのきっかけとなると言う意味で非常に効果的であり、その目的は十分に果たされていると思えます。この語学研修をどう位置づけるか、関心の広まりを重視するのか、あるいは研究手段としての語学、あるいは将来の研究交流のネットワーク作りの契機と考えるかで複数回参加を認めるか否かは決定されると思えます。また、報告書では毎年15人の学生が参加したと言う事実はわかりますが、彼らがどのようなプロセスで選定されたのかは解りません。希望する学生の数にもよりますが、できれば競争的な状況の中で選抜された、という状況があれば彼らの研修に対するインセンティブが一層高まるのではないかと、思えます。

次に2) と3) についてです。

研究拠点の形成ということが2番目の目標です。この点については十分な成果を挙げていると思えます。

個別専門分野の研究、学際的な研究が多彩に組み立てられていると感じました。これは単に報告書の書き方、に類するものかもしれませんが、「共同研究プロジェクト」と銘打った研究である場合、代表者だけではなく、そのプロジェクトに日韓両方でどのような方がメンバーとして参加されたのか、を外部の人間としては是非知りたい、と思います。それは九大だけではなく、その他の場所で研究を行っている人々の研究遂行に大変役に立つのではないかと、思います。派遣事業・受入事業に関してですが、初期に比べて期間はフレキシブルになっているように思いますが、派遣・招請ともに人数が減少してきていることが少し気になります。

人さまの財布の中を覗くようで気がとがめますが、派遣・招請事業の相対的な縮小が「シンポジウム」などの開催のしわ寄せであるのであれば、一考を要するように思います。「シンポジウム」のような社会的発信力の大きなものを開催する必要は充分にわかります。しかし、地味な研究の積み重ねがあり、その上で「シンポジウム」が開催される方が一層望ましいように思います。

4) についてです。

「センター」が収集された文献・資料のリストを拝見しますと、韓国国際交流財団が本腰を入れて支援されていることが良くわかります。そのご努力に敬意を表したいと思います。ただ、潜在的な利用者の立場から言わせていただきますと、「センター」ホームページに掲載されているデータは不足しているのではないかと思います。収集された資料はわかるのですが、書誌的データが不十分なために、例えば統計類で申しますと、何年版と何年版が「センター」には所蔵されている、といったようなことがHPを拝見しただけでは解らない、という不便さがあるように感じました。なかなか手間の掛かることですが、もし改善していただけるなら、「センター」資料室の評価は一層高くなると思います。

以上のような4つの目標に照らして見れば、「センター」は充分にその目標を達成していると思います。このような高いレベルにまで目標を達成されるために

石川センター長や九大の関係者の方々のご努力には頭が下がります。

ついで、センター長が述べられている事業遂行上のスタンスに関してです。まず特筆されるべきは2001年から発刊されている年報とニュースレターに関してです。このような冊子を発行することがいかに大変であるかは、昔、私がアジア経済研究所で『アジア経済』の編集長をしていた経験がありますので大変よくわかります。しかし、このような冊子が「センター」の活動を広報し、また研究成果を蓄積し、「センター」外の研究者や韓国に関心を持つ人々に有益な情報発信となっていることは言うまでもありません。開かれた結節点としての「センター」を考える際に、極めて重要な役割を果たしていると思います。外部にいるものとして是非、続けていただきたいと要望しておきたいと思います。

第二にネットワーク作りに関してですが、石川センター長が活動報告で述べられておりますように、国内のみならず、海外との関係設立に一層のご努力を要望したいと思います。本日の参加者であります崔章集先生の所属されております高麗大学校では、魚允大総長の下で「韓国研究センター」が設立され、海外との韓国研究ネットワーク作りを始められると聞いております。去る8月に同総長にお目にかかりました際、私どもの教室もその中に入れて下さいとお願いを致しましたが、「センター」が日本のハブとしての役割を担って下されば、「センター」の名声は一層高まることと思います。残念なことですが、私どもの教室は、大学院の一部として設立されました関係上、継続的にそのような役割を果たすことは困難な状況です。

また、昨年、私が副会長をしている現代韓国朝鮮学会が「センター」との協力の下で全国大会を開かせていただきましたが、このような機会を与えてくださったこともネットワーク作りに大きな意味を持つのではないかと思います。その際、かなりの数の会員が「センター」を訪れましたが、その多くが一層の認識を持ったことと思います。

以上で、私の評価報告は終わりますが、最後に、私

どもの教室の悩みとも関わることですが、韓国学の研究者を育成した後の彼らのポストを如何に確保するのか、と言う問題も今後重要になると思います。ある面では競合関係になるのかもしれませんが、韓国朝鮮学のポスト拡大をいかにして可能にするのか、という点も今後の課題として残されているように思います。

いささか、失礼にわたる評価もあったかもしれませんが、その点をご海容いただきたいと存じます。有難うございました。

(2003年11月29日、「RCKS 国際シンポジウム2003」にて報告)